

横浜イエステディ

青木虹二／企画調整局都市科学研究室副主幹

港を中心に形成されてきたヨコハマ文化は、新しい市民が増えるにつれて薄れてきているようにみえる。だが流入してきた新市民がつくる雑種文化だという点では、これからも受け継がれる一面をもって、ヨコハマ文化とは何であったのかを振り返る。

一——ダウン・タウン気質

ハマっ子といえば、内藤やす子(以下、敬称略)は本牧育ちのハマっ子だが、彼女が、さる一月に、NHKの、ど、自慢にゲストとして出演したとき、一しょに出た森進一と顔を合せたとたん、「やあ、先輩」と気軽に声をかけたものである。芸能界では、大先輩にあたる森進一の方では、「ムニヤムニヤ」と、気おされた訳ではあるまいが、ちょっととまどった応待ぶりを一瞬示した。

同じハマっ子の一人である私は、たまにこのテレビをみていて、「あ、やっぱり」という思いと、「誤解されなければいいんだがな」という思いが去来し

た。中・高校生のあいだでは、先輩といういささか古めかしい呼びかけかたが、目下流行中らしいが、きやすい態度というのは、相手の方からみれば、いささかオッチョコチョイということだ。

鹿兒島からひとりで上京してきて、世に出るまで散々苦労したらしい森進一には、軽薄なる都会っ子とらえられたかもしれないなと思ったので、ここではハマっ子気質というものの弁明から、筆をすすめていきたい。

反町の松ヶ丘で育って、いま藤沢に住んでいる作家の宮原昭夫は、すでにこう書いている。

「おそらく私の、軽率妄動、安っぽい行動性、とめどないにぎやか好き、見

境いのないはしゃぎかたなど……」

(『広間と密室』)

宮原は、自分のこうした性格を、病身であったために、「わたしのふるさとである寝床へ、ちょっと油断するとたちまち這い込んで行きだす自分自身への強い警戒心、あの無為の深淵の魔性の魅力への、私のおそれ」から生じたものと考えているようだが、私にいわせれば、病気のためではなく、横浜という街で育ったために、身についた属性なのではないかと思う。これは自らをかえりみても首肯できるのである。

ところで、このいささか自虐めいた、性格規定から浮びあがるのは、軽佻浮薄なる都会人という印象であろう。私は、

- 一——ダウン・タウン気質
- 二——すべてこれよそのの街
- 四——通過者が刺激をあたえた
- 五——享受ではなく創造を

これに真情溢るとの形容詞をつけたいのであるが、どうであろうか。人と人であふれた都会で育った人間には、自己を相対化できる能力をやくから身につけている。それはまた、他人を他人としてみとめるということだ。吉行淳之介が軽薄ということばをさかんに押しだしたにもかかわらず、残念ながら軽薄はまだブラス・イメージに転化していないが。

宮原と二中で同窓生だった作家生島治郎は、敗戦後上海から引きあげてきて、一時石川県の金沢に住み、それから横浜へ移ってきたが、
「転校した学校では、すぐに友人ができた。彼らは北陸の街の閉鎖的な人たとは対照的な、開放的な人種だっ

た。彼らは新入りの私を格別いたわたり、特殊な眼でみたりということせず、ごくふつうの、自分たちの仲間として扱ってくれた」

と記している。私の記憶では、いくら開放的な都会の子供でも、小学校のときは、転校生にたいしてそうではなかった。どうもよその扱いはしてはいたようだが、たしかに中学生ともなれば、生島のいうとおりであった。つまり、いっばしの大人ぶりといおうか、子供ではないとの意識から、閉鎖的でなくなっていたようだ。

戦前の横浜は、東京とくらべると、手に外人が住んでいた関係からか、東京の山の手にあたる部分は寺尾・妙蓮寺・本牧などと分散しており、町の大部分は東京でいう下町で占められていた。つまり、かつての横浜はダウン・タウン（英語の意味では、商業地域とか盛り場のことだが、ここでは日本語のイメージとしてのダウン・タウン）のまちであった。東京の下町が小商人や職人から成り立っていたため、意外に保守的な側面があるのにはいし（人見知りがはげしいし、手ぶらでは他人の家へいけないという美德を持っていて）、わが横浜人はあけっぴろげといおうか、天衣無縫の趣がある。（山本周五郎の世話ものの小説に活写されている）。

二——すべてこれよそのもの街

明治の横浜は、田舎から笈を負って出てきた人々が、東京をめざしたものの、入りこむすぎがなくて、東京の一つ手前の横浜にひとまず腰をおちつけたというのが実状ではなかったろうか。

文明開化の時代には、海外からの新文明輸入の窓口であり、一大情報センターの役割を果たしていた横浜（今年のNHK連続テレビドラマ『花神』でも、大村益次郎は英語学習のため、毎週「ボンのところへ東京から通っている」であったが、それぞれの分野で自立の動きがはじまると、残像はあとまで尾をひいたといえ、横浜の光栄は歴史的には終りをつけ、明治の中頃からは港を中心に機能する経済都市として発展していくことになる）。

そこでストックなしで田舎から出てきた人々がまず従った仕事というのは、仲仕のような荷役や、茶焙のような再製加工業であったろう。茶焙は大部分が女性の仕事だが、二十前後であったといわれる輸出茶の再製工場は、居留地の商館に付属しておかれていた。最盛期の明治二十年代には、横浜の人口が二十万人位のとぎ、五千人の婦人が働いていたといわれるから、成人女子を四分の一の五万人とみると、一割の婦人が従事していたわけ

で、交通機関のなかった当時としては、実に膨大な数であったことがわかる。南区の永田から朝の三時起きで通ったとの記録がのこされているので、一里、二里をものともせず、集まってきたらしい。

「汗びっしょりで気合をかけたながら働く」焦熱の職場ではあったが、輸出貿易品のうちでは、生糸や茶などの嗜好品は価格の変動がはなはだしく、それが労働者の賃金にも敏感に反映したから、安いときはひどかったろうが、高いときには、手内職の比ではなかったので、かくも多数の婦人が働きにでかけたのであるう。

今日でも居住者の流動がはげしく、十年で半分がいかかわってしまいう横浜ではあるが、明治時代にはもっと極端で、明治の初めの人口が三万、それが二十年には十萬、四十年には三十萬とふくれあがる一方だった。十倍になったということは、裏を返せば、明治期には十人のうち九人が新住民という勘定になる。これでは地元意識だの排他意識だのが生まれようがなかったし、東京の下町氣質が何代もかかって形成されたのにくらべ、横浜は、このころは一代目しかいなかったわけだし、また仕事も手内職のような孤立した作業でなく、集団作業で暮しをたてていたのだから、そこに開放的な空気が横浜を覆っていたということが考えられ

る。

以上が横浜人の美德だが、反面貿易を中心に横浜の経済が廻転していた関係上、成り行きまかせといふところがあり、投機的な利那主義が横溢しており、一旗上げようとの意識が強烈だったから、地元への愛着などは二の次、三の次になる。その結果、明治期から横浜は教育に冷淡であるとの批判をうけることになる。

いくら人口が急増したとはいえ、小学校の二部授業がさいごまでのこっていたのが横浜であり、また中等教育においても、女学校が明治三年におかれ、日本最古の歴史を誇っている（現、フェリス女学院）のに、男子校は十五年になって本町外十三カ町立でY校の前身横浜商業学校が設けられたのはまあまあとしても、（市立になるのは大正六年）中学校にいたっては明治三十年にようやく県立一中が発足する有様であった。

中学がなくても実業家の子弟は東京へ通ったり、寄宿していたし（獅子文六など）、実業教育のY校からも初期には左右田喜一郎や小島鳥水が出ていたが、教育にたいする姿勢が低かったのは否めない事実であろう。なかには美術評論家の矢代幸雄のように、Y校へ入ったのはいいが、ソロバンができないため、神中へ入り直したという人もいる。

明治の横浜は、今日のエコノミック・

アニマルを先取りしていたような町であ

ったらしい。こうした新開地では、どうやら文化は享受するものではあつても、生み出すものとしては意識されていなかったフシがある。もともと一代で財産を築きあげた横浜の商人たちは、財産づくりにいそがしくて、政治家も市長も教育者もジャーナリストも、およそ商人以外はよそからきてもらえばいいとの気風であつたようだ。島田三郎、市原盛宏、美沢進、三宅磐などのすぐれた人物はいずれもそうであつた。こういう状況であるからまして文化においておやであらう。

三 通過者が刺激をあたえた

横浜に文化的土壌がなかつた関係から、横浜の文化的なうごきはまず、たまたま横浜の職場へ転じてきた人々が、まさに地元の青年をあつめてサークル活動を行なうことからはじまつた。

明治の三十年代には、詩人の伊良子清白が検疫医として在任していた。彼は、『文庫』の同人であつたから、おなじ同人の一人である年少の小島烏水と親しく、夜連れ立って散歩したり、芝居をみることもしばしばであつた。そして烏水は、そのころ『明星』派の詩人として出発した山崎紫紅とは年来の友人であり、いっしょに金峯山や八ヶ岳などに登つて

いる。

烏水は、讃岐高松の生れだが、父が横浜税関につとめていた関係で、西戸部の税関官舎に住み、そこから老松小学校、Y校へ通い、卒業後は二つほど職をかえたのち、横浜正金銀行にうつり、以後定年までその職にあつた。

一方、のちに劇作家となる紫紅は戸部の地主の家に生れた生粋のハマっ子だが、三十九年一幕物「七つ桔梗」によつて劇作家としての地位を確立した。のち自然主義文学が文壇を制覇するや、紫紅は文壇とははなれたところで、座付作者にちかいかたちで劇壇人となり、晩年には市会議員・県会議員などをつとめた。『横浜市史稿』の推ばん者は実に紫紅であつた。

こうした人たちの文学活動は、当時まだ無名の青年だつた長谷川伸や吉川英治にも刺激をあたえている。伸の『自伝隨筆』には、「この横浜にイラコスズシロという詩人が、港湾の防疫医官でいると聞いた。その詩人が作品を『文庫』という雑誌に発表していることもいい、一度か二度か憶えはないが、その詩の一節をちょっと気どつて朗誦して聞かせてくれた」友人がいたので『文庫』をよんでいし、英治は十代の頃、「『文庫』だの『明星』に迄、詩や歌などを送つていた」(『忘れ残りの記』)と記している。

大正期になると、のちに外交官になる

詩人柳沢健が横浜に赴任したのを機会に、年少の詩人たちが柳沢のまわりにあつたり、そこから、大正七年には柳沢と北村初雄・熊田精華三人の共著になる『海港』が、ついで八年には詩誌『詩王』が刊行された。矢野峰人はこう書いている。

「柳沢健はポール・フォールに最も強く動かされた詩人の一人で、その情熱は忽ち彼の周囲に集まる年少詩人北村初雄・熊田精華に伝染し、彼等はこの『詩王』の“Paris sentimental”になり、横浜を巴里に見立てて“Yokohama sentimental”を謳歌するに至つた。北村初雄は、実業家北村七郎の長男で大森に生れた。神中、一ツ橋を経て、父と同じく実業家を志したが、大震災の年、二十五歳の若さで夭折した。初雄は大正六年に、数え年二十歳の年少詩人として、『吾歳と春』をもつて詩壇にデビューした。三木露風の門下で、のち日夏歌之介にまなんだ。詩集には、ほかに『正午の果実』と遺稿集『樹』がある。師の露風は、初雄について、「北村君は青年らしい青年である。広い谿間で非常によく伸びてゆく樺の木か何かが、夏が来たので若枝を出して一層繁つてゆくように、北村君はそのように香ばしい青年である」と紹介しているが、同じく先の

矢野峰人によれば、「北村は青春という言葉を新しい感覚を以て生かしたような、人生讚美の詩を書いた人であつた」。生糸恐慌や大震災のまえの横浜は上り坂の活気のある街だったが、この街の明るい側面が、若い詩人たちの手で、ヨコハマ・サンチマンタルとして定着されたことになる。たとえ、それが銀の匙をもって生まれた子の作品であるための、ひよわさをまぬがれぬとしても、二度と返らぬ古きよき日の想いは、詩人によつてしか刻印されぬものである。つぎに北村の“Adieu”という詩から、一部を紹介しておく。

「さようなら、
振返ると、まだ笑つて居る小さい仙女
／樹の影に涵つて居る白い額は花のやう／風見のやうに此方を指さす可愛い眼。」

一方、大正時代は社会運動の開花期だが、その影響で、横浜でも大正九年には根岸正吉・伊藤公敬の共著になる『労働詩集』とん底で歌ふ』が刊行されている。これもまた横浜の別の側面である。次に、伊藤の「空腹」という詩の一節をあげておく。

「さびしきはいずこもおなじゆうぐれ、
お前方の人ら帰つて、馬の嘶も聴えず、
仲仕らの地を掻く熊手の音のみ高く、
航路標識所の燈台はかがやきそめぬ。」

昭和に入ると、横浜生まれの作家として、長谷川伸・吉川英治・大仏次郎・獅子文六の四人が大衆文芸の方面で活躍する。なぜ純文学でなく、大衆文学の方に横浜出身の作家が輩出したのかは興味のある問題であるが、私は、仮説として次のように考えている。

この四人が世に出る前の純文学というのは、きわめて乱暴な表現になるが、ひとこといえば、自然主義の小説は田舎者の文学、白樺派の小説は貴族のお坊ちゃんの作文というわけで、大人の鑑賞には耐えない弱さを有していた。それで若くして社会のなかに投げこまれ、そんなに苦勞を重ねていた伸や英治には、純文学などは青くさい若者の手すざびとしか受けとられなかったのではないか。獅子文六の場合は、「東は東」のような若くしてすぐれた劇作を書いたのにもかかわらず、劇壇以外では評価されず、これは生活がたたないというわけで、大衆文壇へと転身したことになる。

横浜も昭和にはいると、六十万を越す大都会となり、たまたま作家が通過者として横浜に住んだとしても、明治・大正のようなインテリメイトな関係が地元の文学青年との間に生まれるといった関係はなくなった。

昭和十年代になって、北原武夫が都新聞横浜支局記者として勤務のかたわら、

横浜を題材とした小説を発表したり、中島敦が横浜女学校の教師をしていたかたわら、東洋に題材をとった作品『弟子』や『季陵』を書いているが、いずれも個人のいとなみとしての文学活動という点で前代とは違っている。横浜の文学青年は自分たちでそれぞれグループをつくって同人活動を行なっているが、戦争にたつてから世に出たのは、こうしたグループからでなく、一人こつぜんと自分の体験を物語った野沢富美子（『煉瓦女工』）であった。

戦後もこの事情は変わらない。アメリカ軍占領末期の、昭和三十年代はじめに、東京の下町から横浜へ来て二年ばかり住んだ小林信彦には、「ヨコハマ・グラフィティ」（『野性時代』一九七五・三）というすぐれたエッセイがあるが、そのなかで、「外人の渡来にそなえて、安政六年に、横浜に商人を勧誘したときから、ここはすでに（一旗組）の街となるべく運命づけられていた。……（昭和三十一年には）街の中心部からカマボコ兵舎が姿を消し、米兵相手の娼家も人影がまばらだった。ヘリ・ポートもなくなっていた。米軍は、在日兵士の数をさらに減らすと発表していた」。しかし「横浜に関する限り、（戦後）は、外見的にも、終っていない。山下公園は接収されたままであり、本牧のPXはごった返して

いた。ビル・チャカリング劇場はネオンが輝き、クリスマスになると巨大なネオンのトリーが立った。PXのまえば米軍家族の車でいっぱいだった」と記している。そうした状況のもとで、小林は、「横浜という土地を憎みつつ愛していた」二十代の終りをすごしたのである。

いまでは四十歳をこえた小林は、これまで「オヨヨ大統領」のシリーズ小説を六冊書きあげたが、これがはじめ昌文社や早川書房から出版されたときは、一部の熱狂的なファンがついていただけだったと思うが、最近角川文庫におさめられたからは、読者層が中学生や高校生にまでひろがったようだ。

ところで、このシリーズに登場する、深夜放送のディスク・ジョッキー、テレビディレクター、混血児、華僑、中国料理の達人、きのうのジョーなどが、それらしい実在人物のもじりとして描かれているが、あの占領時代の横浜のわいざつな世相にびたりとあてはまる人物たちであることに気づく。考えてみれば、戦後の横浜からは、ジャズマンからコピーライターにいたるまで、およそ軽佻浮薄と思われる分野での文化人がむやみと輩出しているのである。

これは十年にわたったアメリカ軍の占領を抜きにしては考えられない。占領は、すでに大人になっていた横浜人には

マイナス現象としかたえられなかったろうが、昭和二十年代に少年であり、青年であった人たちには、あの原色をぶちまけたような奇妙きつて、つな横浜の風景の方がかれらの原体験であったのである。アメリカ文化を忠実にコピーするところから、かれらの文化的活動がはじめられたのである。

いってみれば、アメリカ軍の存在そのものが、通過者としての巨大な役割を果たしたことになる。イデオロギー抜きに、アメリカ文化にのみこんだ若ものたちのなかから、現在わが国軽文化の第一線に活躍するミュージシャンその他が生まれでた所以であり、また一方、抵抗感覚をつけた若ものたちのなかからは、作家なり評論家なりの物書きが生まれている。

さきにふれた宮原昭夫と生島治郎の二人の同級生である青木雨彦は、中学一年生のとき敗戦を迎えたという典型的な「疎開派」であるが、在学中に中学校がGIの火遊びで全焼するという体験をしている。これまで『日経』紙や『ミステリ・マガジン』など比較的マイナーな舞台に随筆をのせていたが、今年になって『週刊朝日』に人物論の連載をはじめた。「昭和ヒトケタ」生れで、戦争被害者の末端に位する彼は、いまだに軍歌がきらい（正確には酒を飲んで軍歌を歌う

奴が嫌い)であり、某婦人雑誌がきらい(正確には戦争中に欲しがりません勝つまではという標語をつくった人物が嫌い)だといっている。感覚の問題であるとしても、これが彼のバックボーンなのである。

感覚をばかにしてはいけない。戦争中、高島町辺で使役をしている外国人の捕虜をみかけた婦人が、「お可哀いそらに」と嘆声をもらしたため、敵国人に同情を寄せるなどは非国民であるとのきつい批難をこうむった過去の例がある。

そのご婦人が横浜のひとだったかどうかはつまびらかでないが、外国人の存在が同質のものとしてとけこんでいた、横浜ならではの話として受けとれる。要するに彼女はあたりまえのことをいっただけなのである。

四 なぜか女性が活躍する

港町では、男の子と杉の木は育たない、というのは、新潟でのいっただえであるが、同じ港町である横浜でも事情はかわらないらしく、すでに獅子文六(岩田豊雄)は、戦後の混乱期に書いた小説『やっさもっさ』のなかで、「ヨコハマの女にはえらいのがいるが、男はダメだ」と、喝破している。

そこに登場する、慈善婆さんといわれ

る福田嘉代刀自は、「古い横浜人の自覚と誇りとがあった。明治時代の横浜は、東京を尻目にかける優越感を懐いたことがあったが、彼女は、その記憶の残像を消すことができないのである」と描写されている。

ふるくは渡辺玉子女史以来、川喜多かしこ、草笛光子、岸恵子、安井かずみ、藤村志保とつづいて、なぜ横浜では女性優位なのか。歴史的には、つぎのような理由が考えられる。

まず、横浜初代の男性。これは一旗組の山師的商人の群れだが、激烈な競争を生きぬいて財をなした商人らは、こんどは上昇指向から、アッパー・クラスの女性を妻に迎える。そして二代目。これは生まれたときからの上流階級で、しかも女の子は性格が父親似の場合、そのエネルギーを引きついでおり、しかも横浜の女学校は公立よりも私立のクリスチャン教育が先行していたから、良妻賢母型でなく、独立自尊型として仕込まれたものと思われる。男子が都会っ子らしく「身を立て、名をあげる」のに抵抗を感じ、ムキになれなかったのにたいし、女性の方は、その置かれた環境から、素直に自分の能力を発揮することができた。それが横浜から抜きんで、才能のある女性が輩出した理由ではなからうか。戦前の平沼高校(第一高女)は、音楽学校が一

学年七〇名しかとらなかつたときでも、毎年必ず二、三名は進学していたという(昨年は音楽学部〇、美術学部二だった)。

さいきん、話題になった横浜出身の若い女性では、高瀬春奈と田代泰子がいる。高瀬は昭和二十九年生まれで、フェリス女学院をへて、現在早稲田大学文学部に在学中だが、演劇を志していた彼女は、今度「大輪の花のようなイメージ」を買われて、四月からNHKの連続テレビドラマ「いちばん星」で、主役の佐藤千夜子を演ずることになった。

田代泰子は、この一月、国連大学の翻訳官に、男女合せて一、二五八人の応募者のなかから、ただ一人選ばれた。東京の学芸大附属高校をへて、大学は三鷹の国際基督教大学を出ている。大学生のときは、パペット・クラブ(人形劇)のサークルで活躍していた、子供好きの明るい性格の彼女が、雑誌の編集者から翻訳官へと転進するキメ手となったのは、新聞情報によれば、「語学の才能よりも言葉のセンス」が抜群だったのによるようだ。

五 享受ではなく創造を

敗戦後のいっとき、日本は文化国家として再建すべきだとの論がさかんだった

が、そのころ都会はどこも焼け跡で、食糧さがしに大変だったから、たまたまたくさんの文化人が田舎に疎開していた関係もあって、まず地方において文化活動がはじまった。しかし、それも二―三年後に疎開者が潮のひくように都会へ戻ってしまうと、結局根づかないで終わったのである。

その後、高度成長時代を迎えて、地方都市に立派な文化会館や市民ホルの施設がぞくぞくとたてられ、それなりに市民のニーズにこたえているが、いくら施設がよくなくても、文化の創造者が生みだされない限り、文化活動が活発だといえないであろう。

昭和二十二―三年には、私も新潟県北蒲原郡の金塚村に疎開していたが、隣の加治村に、国画会系画家の佐藤哲三が住んでおり、わずかの期間だが氏の下で文化活動の手つだいをしていたことがある。さいきん洲之内徹が『芸術新潮』誌上で、なくなった佐藤哲三の見なおしをしてくれていて、大変うれしかったが、戦時中から佐藤は村の子供たちに画の指導をしていた。その子供たちの書いた、全紙一枚もの農具を描いた大きなデッサンのすばらしさは、いまま記憶にのこっている。そのとき、人間の能力の開發には、いかに師というものの存在が必要であるかを痛感したものである。

文化にどう行政がかかわるのか。まず施設づくりであろうが、享受するだけの施設にとどまってはなるまい。美術館よりも、まずギャラリーをというのはそれなりに、ひとつの見識で、まちがっていないのである。博物館だって、本来の機能は単なる陳列場ではなく、研究機関なのだ。わが市では小学生までの施設はい

ろいろと工夫がこらされているが、中高校生になると、学校があるからというわけでもないだろうが放置されている。どうやって十代のなかから創造的な芽をのばせるかが今後の課題であろう。それには仕掛けとしての、つまり場的な施設が望まれる。

かつて鎌倉アカデミアからは、多数の

文化創造者が輩出した。アカデミアがつぶれた後、三枝博音、西郷信綱などのすぐれた教師を引きついだ横浜市立大学の文理学部からは、開校後二五年、文化の従事者（ジャーナリストなど）はたくさん出たが、創造者が出てこないというの

よって、文化事業にたずさわる機会はいぶんふえてきたし、大学の文科出身者にもそうした第三次産業への途がひらかれているが、そのためにかえって創造の面でドロップしているのではないかと危惧されるのが、今日の現状である。

は、考えさせられる事実である。テレビ、ラジオなどマス・メディアの隆盛に